

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可  
平成十七年二月一日発行（毎月一回一日発行）  
第十一卷第十号（通巻第一三〇号）

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第130号

2. 2005

ぽっぺん

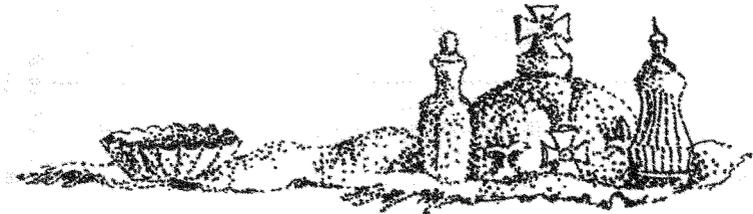
品川 鈴子

浮世絵に向かひぽっぺん吹き交す

ぽっぺん・ぴっぽんとひととき姥遊び

ごみ袋夜陰に捨てし雪女

温泉に更けて白髪の雪女



針はじめ釦をつける小繕ひ

読初めは和綴ぢほつれし撰津図絵

合戦の血を浴びたるや梅擬ももじりぎ

直実の浜に春着の染白髪

敦盛忌こども病院ひつそりと

撫肩の被布乗り込めり京都駅



# 第九回ぐろっけ賞発表表

受賞作品

俳句の部

かき氷

石橋 萬里

秋うらら厩それぞれ名札揚げ  
地下足袋の指反り返る松手入  
狛犬を刷毛で洗ひて年用意  
淡雪や金時顔の硝子工  
薄氷に落ちしばかりの鳥の羽  
調教馬突如嘶き山笑ふ  
溶けるまで墓に供へるかき氷

受賞作品

俳句の部

残照

栗田武三

支那粥に適ふ香菜今朝の秋  
身に沁むや長子僻地へ赴任の報  
鯊釣の子の貪果容れ夕支度  
秋の駒地響きさせて尿りけり  
抜け駆けをしたる証拠の草虱  
大勢に嗅がれ松茸売れ残る  
常臥に知らせぬ訃音秋深し

# 玉 鈴

愛媛 福田かよ子

朴落葉枝離る時音出して  
群鳥と睨み合う日々柿熟れる  
猪垣の家にかぶさる柿たわわ  
鶏頭の頭叩かれ通学路  
秋の冷え母乳の匂ふ嬰やを抱く

兵庫 藤田かもめ

小鳥来る形さまま異人墓碑  
刈田越し寺の白塀一文字  
たたなはる多紀の山々雁渡る  
トンネルの口を塞ぎて霧襖  
弁慶の鐘のひび割れ虎落笛

大阪 藤田京子

蜘蛛の囿が句碑にかかりて近づけず  
散歩犬川に飛び込む残暑かな  
秋彼岸鴉 霊園飛び交えり  
秋桜石の金櫃置かれあり  
秋日和絵馬の駿馬が嘶けり

# 吟

兵庫 史あかり

瘦せがまんも男の美学秋麗ら  
菊の香や鉄斎遺せし墨すり機  
甲山を父と恃みて鴨来る  
炎上と復興幾たび紅葉寺  
人生の戦友は夫温め酒

愛媛 星加克己

文化の日横書きわれに容れられず  
水底に魔女の足あと十月尽  
男系のいのち短しうろこ雲  
雄岳より高き雌岳の霧化粧  
本局の脇にありしが花八つ手

香川 細川知子

如月の重き蔵戸をごろり開け  
床に落つ白髪ひかりて日脚のぶ  
凍戻る開かれぬ戸のむかう側  
烏雲に吾も鴉も町を出ず  
腹割つて話せる友よ春うれひ

兵庫 細野 恵久

指先の傘よりのぞく春霞  
目の赤き鳩が鳩追ふ建國日  
鹿尾菜刈るとて付添ひの来ぬ日中  
春寒しエクスセル覚えては忘れ  
流れ藻のむらさきまだら春の潮

香川 松井 洋子

吊し柿棚田の上の一軒家  
一刀にぴしと弾けし大だいこん  
鬼灯や姉には敵はぬことばかり  
少年に言葉すくなし林檎かむ  
月白にいよいよ深し海の闇

千葉 松浦 途子

鸚鵡肩に少年御輿の後歩く  
命婦乗せ祭りの馬は神妙に  
鰯雲飛込台の上流る  
薄物も今日で着終い風通す  
墓洗う供物を狙う鴉二羽

愛媛 松本 恒子

土石流の山家に残る吊し柿  
新婚もひとりの爺も秋刀魚焼く  
幾度も嵐くぐりし今年米  
「ええですらい」南予の湯屋も猪鍋も  
切り株に雲水と座し秋惜しむ

愛媛 三浦 如水

栗色の髪に冠神楽巫女  
小春日や花鉢並べ変へてやる  
日向ぼこすぐ眠る人しやべる人  
石路の花享年二十才の遊女墓  
冬ざれや大字小字残る里

愛媛 三浦 澄江

芥子真つ赤残り火吾も炎やしたし  
喜びも悲しみ事も白き菊  
夜長妻皺を愛しむ古鏡  
サルビヤの真つ赤は生きる心の灯  
城内の冷え名刀の底光り

# 薬草歳時記

(二二九) ハコベ (繁縷)

## 八木 紀子

カナリヤの餌に束ねたるはこべかな 正岡 子規

花の美を愛でる秋の七草に対し、寒中に採れ食べられる春の七草のひとつハコベは古名をハコベラと呼び、小型で色が紫がかったコハコベと濃い緑のミドリハコベを合わせて呼ぶ。大型で茎が赤いのはウシハコベ。

ユーラシア大陸原産で乾燥地にも強く自家受粉し農耕と共に寒帯から熱帯まで世界中に広がった。二年草で春から秋(3~9月)に白い花が咲き繁り、茎の中に維管束である一本の筋(縷)があるので漢名や生薬名は繁縷。因みに七草粥など食べると口の中に残るのがこの筋です。昔から小鳥の餌に重宝されヒヨコ草、スズメ草とかアサシラゲなど呼び名も多い。

薬用には全草を春〜夏に採集し水洗い後日干しにする。種子に脂肪油を含み、詳細不明だが利尿、浄血、催乳作用があり民間で婦人の妙薬とされ、虫垂炎、胃腸炎、浮腫にも用いられる。歯痛、打撲傷、腫れ物に外用する。

ハコベの青汁は葉緑素、Ca、酵素を含む。歯槽膿漏の改善と予防には生のハコベを乾燥し粉末にした物と食塩を3対1の割合で混ぜたハコベ塩で歯ぐきをマッサージュするとよい。これはハコベの炎症を抑える作用と塩の收れん作用を利用したものです。

さて八十四才になられる農家のご婦人にお尋ねしましたところ、「ハコベは冬草よ。遅しくて麦の間にも生える、見付けたらすぐにこがん(抜かない)と根が張り広がりがうまく育たない。本当に困り者よ。畑の雑草さ。冬の緑のない庭でニワトリがコッコくとハコベを啄んでいるのを見て鳥の餌になるとわかったのよ。婆様がよく餌とハコベをすってヒヨコにあげていたよ」との事でした。

ともあれ春になり道端の片隅で白い小さな花のハコベと赤い花のスズメの鉄砲そして青紫の花のイヌノフグリの群落到に出会うと仲好し小好しネとほのぼのと嬉しくなります。

参考文献 「原色牧野和漢薬草大図鑑」北隆館

「草木花歳時記」 朝日新聞社

「山野草を食べる本」 講談社

著者略歴 神戸薬科大学卒

ハコベ (コハベコ、ハコベラ、アサシラゲ) [ハコベ属] (なでしこ科)

繁莖、繁穂

*Stellaria media* (L.) Villars

薬用部分：全草

須賀悦子画



はこべらや焦土の色の雀ども

石田 波郷

石垣にはこべの花や橋普請

永井 荷風

はこべらに物干す影の吹かれ飛び

野澤 節子

栄達に遠しはこべら道に咲き

安住 敦

籠の鶏どりに子の呉れてゆくはこべかな

富田 木歩

はこべらの賑ふ日向ありて行く

村越 化石

はこべらや名をつけて飼ふ白うさぎ

大串 章

足もとにありししあわせ花はこべ

北 さとり

はこべらの果まで見しか肩車

小泉八重子

少年は小鳥の餌にはこべ摺り

山口 博通

ぐらっけ

# 鈴の奏

品川鈴子選

次男坊放たれしごと花野駆く 兵庫 中尾 廣美

声だけを頼りに芒野鬼ごっこ

オカリナに沈む陽と風峰芒

わらしべの馬も並びて収穫祭

木の実独楽エノケン映画久々に 兵庫 津田 霧笛

十月の今は母無き四畳半

何事ぞ号外配る冬の町

冬隣針金細工売る男 大阪 石橋 萬里

占ひに惑はされをり木の葉髪

雁の棹へリコプターと交差せり

特価てふ丹波松茸素通りす

小石投げ井戸の水涸れ確かむる 兵庫 長谷川としゑ

咳の部屋ねむれぬ孫よ我も又

モンブラン氷河見おろす幾筋も

師の句集再び読みて冬ぬくし

長かれと大根抜くやすつと抜け

先生と生徒同数返り花 香川 島内 美佳

それぞれに菊供えられ浜の墓

句作する腕にとまりし冬の蠅

大橋の下の漁村も秋深し

竹生島もみづる伊吹背負ふかに 大阪 河村 武信

野分晴柴折戸倒れ庭広し

土瓶蒸しいささか香る二人にて

秋の陽にアンコール仏笑み深し 香川 大空 純子

病室に赤のまんまを持ち帰る

路線沿い休息知らぬ枯薄

袖口の汚れ残りし冬の水

爽やかに先生必ず褒め詞 愛媛 伊藤マサ子

合併の新しき町柿たわわ

鈴虫のひげの指揮棒オーケストラ

秋深し看取りの姪の夜の電話

読書会青きレモンももらいけり

小春日やテニスには勝ち喜寿迎う 兵庫 水野 弘

メモ読みしガイド頬張るみかん狩り

# 秀 鈴 記

巻頭 三句 品川鈴子 評

四句く十五句 三輪慶子 "

\*選句は全て 品川鈴子

次男坊放たれしごと花野駆く

中尾 廣美

長男と次男の性質の違いは、日ごろから解ってはいるものの、たまたま秋草の咲き乱れる開放的な野原で、ほしいままの行動を観ると、やはり際立つ個性に目を瞠る。豪放でたくましいところが頼もしい。「次男坊」の呼び方にも肉親の情が籠もっている。

木の実独楽エノケン映画久々に

津田 霧笛

手作りの玩具で遊ぶことも稀になった子供達。喜劇界のエノケンが一世を風靡したころには、皆それぞれ工夫を凝らして遊んだものだった。久々に昔のなつかしい映画を見たので、木の実で独楽など作ってみた。しかし遊び相手はもういない。

占ひに惑はされをり木の葉髪

石橋 萬里

占いに心が揺れている自分を、危ぶむ折から、髪を梳くたびに多くの髪が抜ける。心配ごとを抱えていると、おのずから抜け髪が増える。どこかで気持ちを切り替えしなれば悪循環に陥るのも、一人暮らしてはしばしば経験すること。

師の句集再び読みて冬ぬくし

長谷川としゑ

師の句集をいつも身近に置いておられる。一度はしっかりと通読したのだけれど、手隙のときにふと開いて又次々と読み進むひと時。冬ぬくしという語によって、恃むべき師を得た安らかさ、誇らしさが伝わってきます。

句作する腕にとまりし冬の蠅

島内 美佳

集中して五七五と案じていると、何時のまにかハエが腕

に止まっている。動こうともしない冬の蠅。やがては厳冬に向かつてその生を閉じる蠅の一瞬の安穩。それを見守る作者はしばらく腕を保持している。どこを切り取って写生するか、それが問題だと思えますが、蠅の生きる精一杯の所を写されたことが佳句になると思えます。

秋の陽にアンコール仏笑み深し

河村 武信

カンボジアのアンコール遺跡群。世界文化遺産に登録されています。仏様は彫りの深いお顔です。秋の陽に包まれた遺跡の中で、仏様のお顔の陰影がことさらに際立って、吸い込まれるような笑顔なのだ、納得できます。

路線沿い休息知らぬ枯薄

大空・純子

路線と言うのは国道何号線などの車の多いところなのでしょう。枯薄は風の吹くままに揺れているのだけれど、自然の風は止むときもある。しかし車の起こす風はひっきりなし。それを休息知らぬと哀れんだ作者。あわれ深い枯れ薄を見る人も無い忙しさ。

秋深し看取りの姪の夜の電話

伊藤マサ子

秋深い頃の夜は寒さも増してきます。多分親を看ておられる姪御さんは、夜しか電話できないのでしょうか。作者はひたすら聞いている。聞くことによつて看取る人の苦勞を少しでも軽くしたい作者の気持ちがあたたかい。

教え子も白髪となりて爛の酒

水野 弘

同窓会で見慣れた光景を、元教師の方が詠まれたのだと思います。白髪同士となつて酌み交わす酒の味は又格別。しかし幾つになつても超えられない元師弟と言う関係。楽しくも、則をはずさぬ酒の席が浮かんできます。

冬浅し浚漈船のにぶき音

後藤とみ子

冬と言つても暦の上だけで、立冬の頃は暖かい日が続きます。浚漈船は河にあるのだろうか。浚漈と言う仕事は、自然を相手におおらかになされる。にぶき音によつて、あせらない大きな仕事伝わってきます。(以下略)